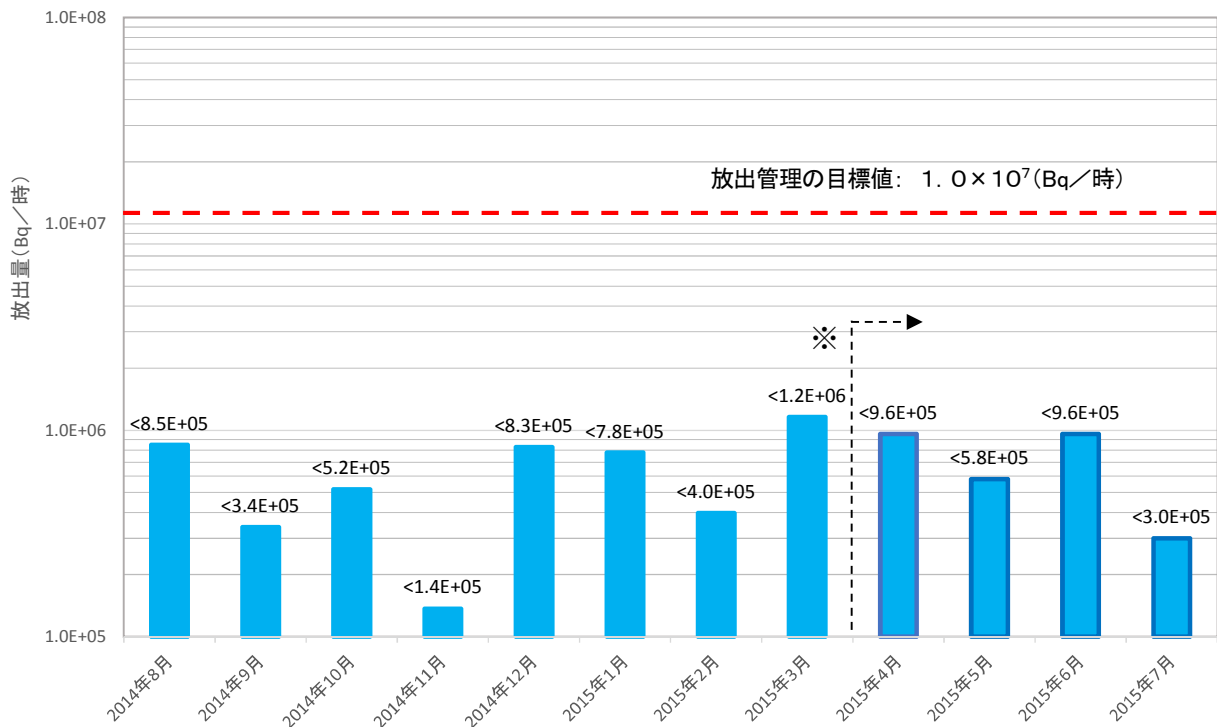


## 原子炉建屋からの追加的放出量の評価結果(2015年7月)

## 【評価結果】

- 2015年7月における1～4号機原子炉建屋からの追加的放出量を評価した結果、 $3.0 \times 10^5$  (Bq/時)未満であり、放出管理の目標値( $1.0 \times 10^7$  Bq/時)を下回っていることを確認した。
- 本放出における敷地境界の空气中放射性物質濃度は、Cs-134: $2.4 \times 10^{-11}$  (Bq/cm<sup>3</sup>)、Cs-137: $6.2 \times 10^{-11}$  (Bq/cm<sup>3</sup>)であり、当該値が1年間継続した場合、敷地境界における被ばく線量は、年間0.00092mSv未満となる。

参考： 実用発電用原子炉の設置、運転等に関する規則の規定に基づく線量限度等を定める告示  
 周辺監視区域外の空气中の濃度限度…Cs-134: $2 \times 10^{-5}$  (Bq/cm<sup>3</sup>)、Cs-137: $3 \times 10^{-5}$  (Bq/cm<sup>3</sup>)



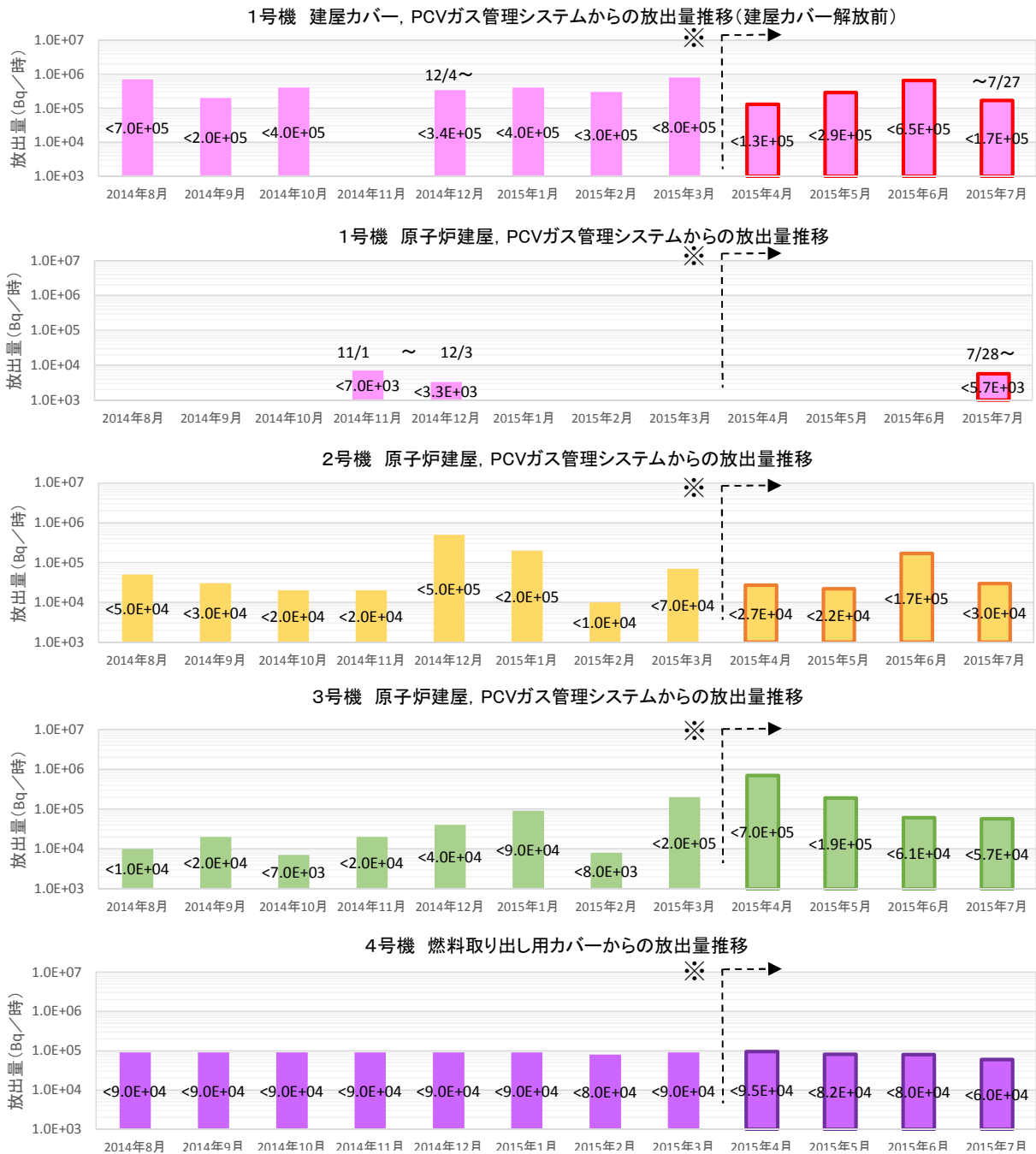
端数処理の都合上、合計が一致しない場合があります。

※月一回の測定結果による評価手法から、連続性を考慮した評価手法に変更

## 【評価手法】

- 1～4号機原子炉建屋からの放出量(セシウム)を、原子炉建屋上部等の空气中放射性物質濃度(ダスト濃度)、連続ダストモニタ及び気象データ等の値を基に評価を実施。(詳細な評価手法については別紙参照)
- 希ガスについては、格納容器ガス管理設備における分析結果から放出量を評価しているが、放出されるガンマ線実効エネルギーがセシウムに比べて小さく、被ばく経路も放射性雲の通過による外部被ばくのみとなるため、これによる被ばく線量は、セシウムによる被ばく線量に比べて極めて小さいと評価している。

## 【各号機における放出量の推移】



※月一回の測定結果による評価手法から、連続性を考慮した評価手法に変更

## 《評価》

1号機について、建屋カバー解放に伴う放出量評価を追加した。建屋カバー解放後の放出量は、前回カバー解放時(2014年11月)とほぼ同等であった。6月と比較して、建屋カバー解放前の1号機は、連続ダストモニタ値の期間平均が低下したこと及び連続ダストモニタ値のばらつきにより、月一回の空气中放射性物質濃度測定値と連続ダストモニタ値の比が減少したため、放出量が減少した。2号機は、ブローアウトパネルの隙間における月一回の空气中放射性物質濃度測定値が減少したこと及び当該箇所の間漏洩率が減少したため、放出量が減少した。3号機及び4号機は、先月の放出量評価結果と同等であった。